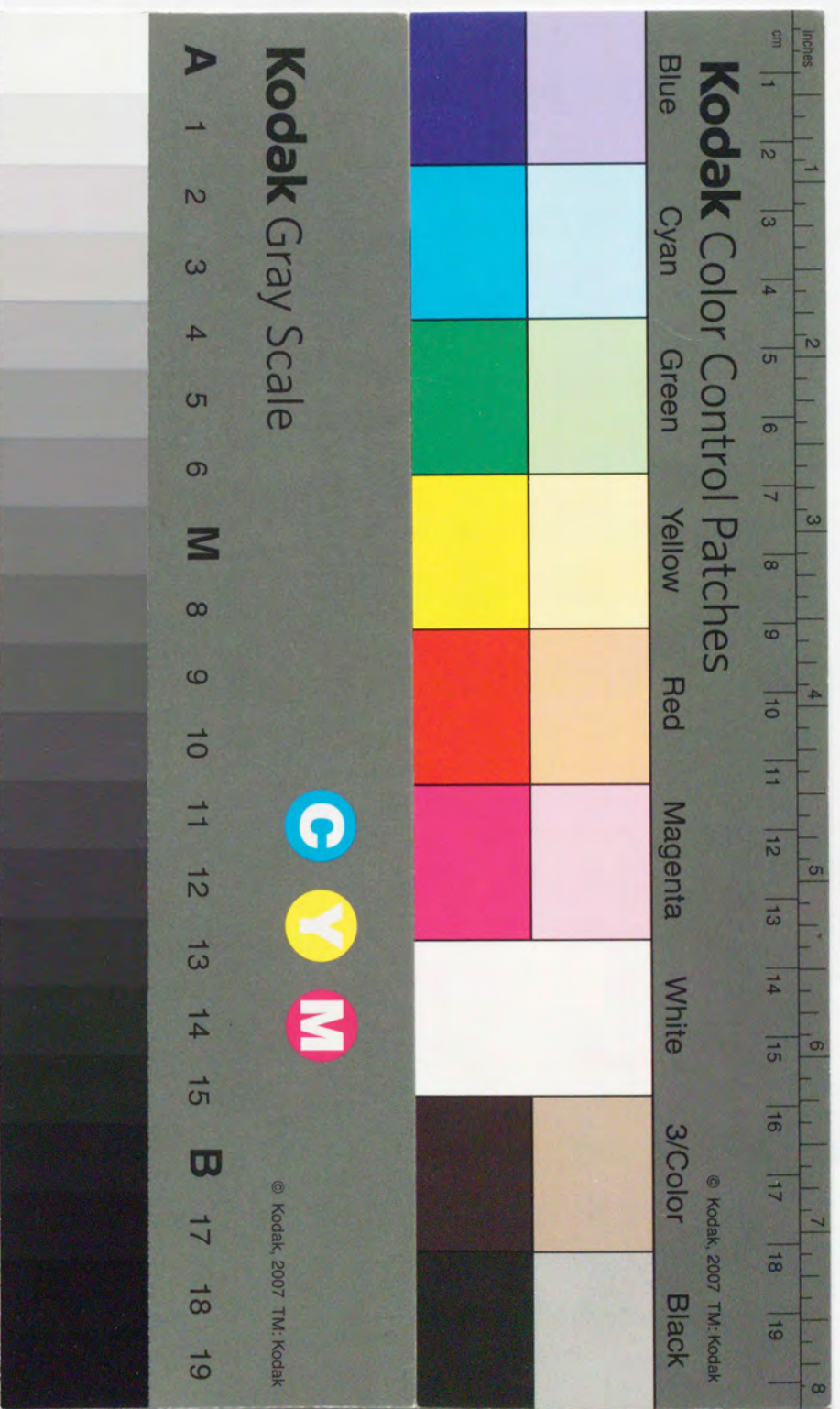




南總里見八犬傳第六輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第五十三回 烟上謬々大田を捕ふ
馬加竊ふ船虫を棄ふ

船虫ハ曉けく菩提所へとてゆく。船守小文吾ひとり。復た悔み
今や小過去く。野猪といひ。このやうといひ人を替へ物と替へ。つるを
あつ。今茲へ。星さ出り。とて。厄難の。く。魚縁る。船
は猶も疑く。い。あ。ゆ。び。尋思を。高屋の。野
並四郎と救ふ。撲傷の。さ。し。唐著の財布。沙金包の先出を
蔵ふ。暇あ。笠の裡面。容措つ。並四郎と呼活。小。殺。彼野
猪。え。共侶。其。路。還。及。金。財布。収め。く。懐。物

ゆゑに彼奴の知れり。人けしむ。それ並四郎が陽の恩を復せし。倡へ。己が宿所を誘ひに殺し。金を奪ふ。斯ういふ合されど。彼奴は。旅客を殺し。路費を奪ふ。年々強盗。今宵も。心起す。これぬ。あつた。この造り。田舎備。ゆき。いんえ。彼首の壁。二尺。頼落。修復。戸を。りく。塞。昔。浅草。枕の故事。病者。思慮の足。誘ひ。伎倆の疎。係られんとせ。愚さ。時。睡覺。毒悪。死。然。女房。良。夫と知り。け。刃を儘。口。心。入。只己の。氣。ひ。瞞。縦。素。悪。の。出。正。証。扱。この尺八。受納。の。受。必。八の

悪吏。人。止。疑。その内。い。ま。れ。ま。の。一。点。も。これ。對ひ。怨。述。身。薄。命。ち。貴。只。管。救。ひ。を。求。め。を。ま。聴。告。訴。と。今。い。疑。入。の。影。護。い。ひ。け。さ。る。け。要。時。の。意。任。り。彼。女。房。の。間。小。さ。れ。と。遠。く。又。行。包。解。披。件。の。笛。袋。の。俵。と。四。下。を。衝。と。起。て。伏。衣。戸。の。小。棚。の。裏。面。小。容。措。つ。ゆ。び。四。下。を。縁。煩。る。蚊。遣。火。盆。小。握。太。郎。の。枝。の。一。尺。の。す。り。燃。残。す。と。れ。究。竟。と。取。わ。け。灰。ち。拂。ひ。行。祇。へ。ま。と。卷。龍。の。故。の。如。く。包。い。し。こ。く。ま。る。程。ま。と。窓。の。隙。り。あ。み。初。て。小。林。を。放。り。鳥。の。声。小。文。吾。の。縁。煩。る。雨。戸。を。半。開。縁。納。り。帶。締。直。の。臂。道。ま。と。脚。絆。も。物。り。掩。て。船。虫。が。帰。ま。る。と。今。飲。々。と。待。程。且。し。外。面。小。道。づ。人。の。足。音。を。れ。と。思。ふ。果。し。違。は。船。虫。の。遠。く。門。の

戸明く進み入り大田ゆ。今更けりぬ。さむらひくおのれけん。菩提所の首尾
よ死まよ。あり久済。たのけま。あふは。後つる。枕廻向の所化を遣りんと。骸を
疾棺に斂め。不覺人あま。れ。て。住持の聖の宣ひ。死。と。い。ふ。小文吾領
死。と。い。ふ。と。せ。し。れ。れ。嚮。中。の。ひ。と。ま。う。往。方。も。あ。ぬ。人。を。索。て。い。こ。れ。々
した旅をまゐる。小後の。み。て。障。ま。る。い。と。ま。あ。の。依。立。別。ま。え。あ。の。の。横。死。の。自
業自得。悼。と。述。す。よ。も。あ。ぬ。と。只。痛。し。死。と。ま。う。の。薄。命。一。善。一。悪。夫婦と
り。も。皆。是。過。世。の。業。報。ま。る。人。の。為。身。の。る。ふ。仏。更。追。薦。肝。要。と。い。ふ。香
道。と。も。あ。ひ。ね。と。い。ひ。と。死。て。懷。し。と。り。ま。粒。銀。と。紙。と。捨。り。亡。骸。の。何。と。り。ま
措。つ。背。向。あ。り。と。免。し。と。と。膝。立。直。し。着。る。脚。絆。も。遠。り。あ。る。程。と。ま。あ。別。路。と
迹。と。濁。る。水。色。の。三。尺。と。拭。費。刀。身。あ。り。と。ま。う。行。包。と。肩。と。被。り。た。ら。お。れ。バ
船。虫。今。い。出。め。ぬ。と。れ。の。の。ま。り。と。火。急。ま。り。朝。飯。を。り。も。進。と。せ。んと。あ。と。も。ま。る

炊。を。せ。バ。送。憾。と。い。ひ。け。て。門。辺。に。ま。る。目。送。り。け。り。却。説。大。田。小。文。吾。と。牛
嶋。の。う。へ。渡。ら。ん。と。く。河。原。を。望。て。赴。く。程。ゆ。と。僅。ま。三。町。許。尚。新。し。草。鞋。ま。る。
締。附。の。端。緒。の。絶。れ。と。ま。と。く。結。び。合。せ。と。ま。う。足。を。踏。伸。と。ま。う。窺。ふ。捕
ま。の。夥。兵。亦。捕。的。と。被。る。声。より。速。く。地。上。に。礮。と。蹴。倒。し。と。登。り。薙。と。組。ん。と。ま。と。く
小。文。吾。の。臥。ま。る。と。足。と。亦。一。働。と。撿。廻。と。又。反。久。せ。或。二。回。或。三。回。投。り。け。り
の。輾。ぶ。の。腰。を。折。り。頭。を。傷。ら。れ。齒。と。折。し。と。中。の。各。々。罵。り。騒。ぐ。の。も。然。と
と。も。又。人。數。あ。り。け。れ。バ。弥。々。と。人。を。累。り。と。捕。ま。り。と。抱。縮。め。と。押。へ。と。索。と。ま
被。ま。け。小。文。吾。の。出。ひ。け。り。と。ま。う。込。の。縲。縛。は。怒。る。声。を。め。り。立。て。ま。い。と。甚。麼
と。る。狼。藉。と。犯。せ。る。罪。と。い。ふ。の。を。浪。人。と。も。兩。刀。と。腰。に。帶。り。某。一。言。半。句。の
他。は。も。う。索。を。被。る。と。や。あ。と。の。う。は。ん。と。敦。團。と。声。も。曳。せ。と。一。箇。の。武。士。の
捕。ま。の。頭。人。と。ま。う。朱。鞋。の。兩。刀。の。め。く。野。装。束。と。十。と。と。携。へ。進。と。立。對。ひ。と

小文吾を乞と睨ま。この癖者既よちや。事のあは及ぶ。陳むればと免されんや。
 汝のむらゝ當家めく紛失ある古代の名笛あり。山といふ尺八を隠し持りと密
 訴のりけり。只この一條のさうぞ縁故を原る。汝の昨夕阿佐谷の里人並四郎
 許宿投りて夜食腹のよたす。技は誇て件の笛を竊ま。さうしてをせ。並四郎
 訝る。この尺八も千葉殿の。十六七年むらゝより。今も年々洵示させて索ね
 る。笛は似たり。要時某は貸る。さうの筋へり。とあり。いづく相違ある。さう
 よ。此價をいづくまわし。と。いわれて駭く。汝が機悪い。酔る体より。果に誼
 嘩は事托せ。口ハ二刀。並四郎が細頸丁と戦ひ。落し。逃去。んとせける。
 下の女房。船虫の特は。伶俐たりの。これに怨む。氣をい。と。言。如此々。は。は。
 賺。く。そ。終。笛。め。く。走。らせ。並。四。郎。が。亡。骸。を。竊。ま。寺。へ。送。り。為。さ。く。苦。提。
 所へ赴人といひ。あゝ。く。宿所を。さ。し。出。叔。村。長。許。ま。り。あ。く。箇。様。々。と。告。る。

ともあれ、亦毛檢の爲、夥兵をねく、五七日當村は、役しく彼処より宿のわ
 らば、ば捨てて起出く、船虫が訴とみづく、巨細は、聽定め、謀入は、彼女
 房を宿所は、又く、あはれ、汝をまづ、又く、せられ、不肖なれども、千代木家の眼代
 烟上語路五郎高成が、今で漏さぬ、天の綱車は、逆、大蟬鳴の要時、八臂と振へ
 とも被、方索の嚙入るまで、縛められ、既まゝ、早虫も、も勢、又く、首は、別々、
 時節で、おひ絶く、假名実名を、の牙の、土丸團郡笛と盗、當時の形勢、箇
 様々々と首伏せ、所責の苦痛を脱せん、さく、せ、ひらき、と辨、せ、さく、
 謹向へども、小文吾驛ぐ、氣色よく、あやめ、うる、は、誣言、く、某、ハ、下、絶、ち、行
 徳の民の子、小太田小文吾、悵頼と呼、り、れ、此、度、上、毛、へ、赴、け、る、以、き、は、伴、侶、を
 失、く、索、で、ま、の、地、は、ま、あ、る、の、を、始、を、い、は、如、此、々、々、之、終、を、い、は、箇、様、々、々、と、
 高屋敷の野猪の、り、又、並、四、郎、は、誘、引、れ、て、下、宿、を、被、処、は、曉、ま、折、並、四、郎、へ

小夜子。路費の金を奪ふ。為に還る。首を喪ひ。縛の趣。此々々とあきく
 止る。小次第。乱れ。その折。女房。船中。いひつゝ。いふ。箇様々々と贈る。魚の
 まも。述す。辨の。本々々々。説話。らんとする。程。いふ。柱。榎。の。樹。の。蔭。より
 出る。船。虫。へ。邊。一。語。路。五。郎。が。前。面。より。あ。く。涙。を。刀。袂。連。必。の。偷。児。が。
 辯。舌。より。迷。され。と。驚。と。鴉。と。諺。を。い。ひ。て。た。て。や。い。の。と。そ。状。現。あ。そ。ろ
 一。口。を。う。つ。よ。は。朝。榜。ろ。り。れ。と。論。より。證。拠。は。何。あ。す。と。憚。ろ。ろ。の。行。
 包。を。披。ち。く。笛。を。賣。さ。る。と。實。事。秋。虚。言。候。を。れ。が。證。拠。と。い。ふ。と。と。馬。戦。
 一。と。怨。む。れ。ば。語。路。五。郎。領。た。く。と。の。怨。む。さ。る。と。さ。う。は。は。あ。り。ま。す。と。も。ね。い。
 や。よ。夥。兵。連。を。癖。者。の。賊。物。を。と。く。と。取。り。て。と。う。ろ。披。く。行。包。の。内。より
 出。る。笛。を。と。く。一。尺。の。笛。の。鹿。角。の。残。灰。を。他。の。骨。を。雨。衣。の。外。衣。物。も。あ。る。と。
 け。り。と。い。ふ。と。と。う。ろ。迷。ひ。解。ぬ。語。路。五。郎。より。船。虫。へ。い。ふ。と。又。居。て。い。ふ。と。

と。と。う。ろ。有。と。い。ふ。尺。八。は。あ。る。忽。地。滅。る。如。く。且。驚。れ。且。示。れ。面。を。皺。め。頭。を
 掻。ち。何。々。と。今。さ。う。い。ふ。と。告。る。と。も。あ。る。と。黄。檗。を。舐。り。て。啞。
 子。も。め。く。や。と。い。ふ。と。同。疑。ひ。釋。さ。り。ける。當。下。犬。田。小。文。吾。い。左。右。を。信。と。見。
 久。ろ。ろ。各。位。何。と。い。ふ。ひ。る。嚮。も。も。う。と。報。る。如。く。と。の。夜。さ。り。船。虫。が。言。葉。
 巧。く。小。彼。笛。を。先。祖。相。傳。の。り。け。と。く。某。は。贈。る。事。の。虚。実。も。心。の。邪。
 正。も。い。ふ。と。知。る。と。う。ろ。と。う。ろ。と。も。い。と。穢。れ。る。人。妻。の。と。の。い。ふ。と。今。何。を。と
 受。く。べ。い。と。い。ふ。と。い。ふ。と。あ。く。推。辭。は。許。さ。る。姑。く。と。の。意。は。任。り。余。
 後。渠。の。菩。提。所。へ。と。く。出。く。め。た。る。笛。守。の。程。件。の。笛。を。臂。近。る。板。厨。の。内。に
 遣。し。置。た。る。と。さ。れ。と。も。笛。を。包。て。る。と。行。袂。の。形。初。は。似。い。と。と。蚊。遣。火。
 盆。小。燃。残。ま。る。枯。木。の。枝。を。卷。龍。け。と。く。伶。肩。より。ち。掛。く。別。れ。て。彼。奴。を
 立。ち。の。欺。く。と。い。ふ。と。濁。り。小。池。ぬ。心。の。潔。白。あ。く。至。て。正。は。知。彼。尺。八。と。

船虫が先祖の遺愛をゆづりて並四郎が竊るを領主の穿鑿無厭なれば
 年未だ秘死けんを吾侪は贈りてへる賊と訴ぐ其実の罪を隠れ
 夫の怨を復さんとなくみ賊婦の邪智奸計をうけ嗚呼懼るこの外も
 亦證據ありその行状る太刀迹の夜より並四郎が其るをといひて
 小横の上より刺徹し雨衣さへ破れり。あても惑ひのまゝ曉る船虫を
 留めおろく。兩名の夥兵連を渠が宿所へまゝ錦の裏に納る。俟ふ
 船の板厨の裡面より又並四郎が刺徹し。太刀迹の蒲團をえくも。席
 薦をえくも定うそ紛れぬ。今さう躊躇するをいれて畑上詰路
 五郎の慚愧は勝む夥兵下知し。且船虫をうち成らせ。遙後方より
 村長を案内し立し。あふ又兩名の夥兵ホをわがし。さう並四
 郎が宿所は到り屋捜せよと下知し。且くと夥兵ホの村長共侶あり

來り跪坐に報る。其ホ並四郎が宿所を展檢し。ける。船の果て編
 室ある。袋戸棚の裏面より又並四郎が亡骸の如此々あり。この餘蒲團と席
 薦の太刀迹人の出入せん為に欬落した。彼壁の為体に至るまで。さう
 犬田とやう人が口状と啗合せり。先ずこれを市覽せよといひ。一人寄て船を
 遞与せ。詰路五郎の裏の紐を解く。て。本末をえく。さう
 大に駭死この樺巻といひ。歌といひ。あふ昔年故あり。紛失する。當家の
 重宝嵐山の一節切は疑ひる。原來件の並四郎のこの節を竊る。船虫が
 奸智の主人の怨を復さんと謀り。より事顯れ。失る。船の出て。奇に
 と小勝を敲く。只管感嘆あふける。船虫の小文五郎。伎倆のうらを飲れ。る。
 あふ。一言半句も諍ひ。誣る。うける。怒る。眼小朱を沃く。兇相悪
 鬼小異る。む。帯の間は隠る。準備の魚切庖丁を逆する。合を。凶。良人の



雙言歎と叫びも果む跳り出走り鬼縛めれる小文吾と駈人とするを駈兵門
驚駭と立塞りあへ狼藉と不敵之鎮と制されども耳あもぢぢと突退
女流は似ける氣暴暴早 剽進むる前多勢勢ひと且その刃は辟易と左右なく
搦めめづける透と透と船虫の小文五目うけく突懸る刃を外を身の翩捕
壓へんも両の母の背よかる縛の索も心も素れぬ大勇避る刃火あちあちと再三
一たび疲勞し七足を蜚しと丁と段角舐熟る力士の突衝は船虫の要時
は堪む弱腰撲まき横はと挫と轉を起しも立む片足は林と踏をえり
これぬを弱船虫の虫をりる息無絶血の氣の失く全身も眼も白く
まき苦痛間ある程もわらむ夥兵の面るげ小食うち聚ひ立代す
重索被る船虫と引起しと推居ける當下烟上語路五郎の小文五景縛の
索をとり解祛く傍は請と辭を改め嚮ゆる玉石のまぐ分れむ片

言以獄を折めんとせ疎忽の一條今ゆる謝まふ小ありの就中驚れあり
所邊両と括れき猛惡の船虫と被死ひる武藝といひ脅力といひ當今
得たる死勇士と並四郎亦が積惡度覺れ喪る笛のふみ入るもみは是
所邊の呪のまれ宜く吹嘘いさへ所邊官途の情願あり武者修行
るごあめ今より當所は杖を駐めり主君千重木殿は仕へめと叮嚀は
いれて小文五吾うち微笑とる罪のむむと辱めを受つといふとも犯人立
地はゆられ疑ひを解れり歎ひこれまほのる浮浪人といふもの然とて
仕官の願はく此度の旅もろろ同行亦を失く索遣はれ合はるもの
所要果るの如きと放遣りめとと推辭と聴む頭をうち擲玉いそ
今放遣る死仕官のめいされれれ旅客よりとも領主は功あり然とて
えものけむと立別れる某は後日の咎めと脱れり所邊がめと田と

姑くあは誤まきくむ。といひて、穀兵が牽居る。船中を仕とて、やそれ北盗家を
抱き、息を忘れ、汝の非義の怨をりて、大田ゆゑを敷きんとせしと、穀兵を
救ふ女流といひ、侮ましく、不覚の働ををされども、さうみく、逆へ敷く。搦捕。
といふと、易い。れども、特は大切なる由を損ふ。このやと、さう、小遠慮せし、小文
吾とのを勞し。す。ゆゑも挑む。陳ある。牧身より、出る。鎧鎧は、縫も、い。現天
罰ぞと、みづから、い。諦めく。わ。い。山の尺八を、並四郎が、竊る。事の顛末、同
類も、首伏せむ。やと、責問へ。船中、低俯する。頭を、擡ぐ。冷笑ひ、ゆゑ、ゆゑ
同扶の勢ひを、威せ。さ。さ。さ。さ。さ。吾侪は、い。む。同類の名を、さ。さ。さ。さ。さ。
う。い。出。ま。難。く。も。ゆ。ね。ど。人の痛。ま。さ。さ。さ。と。ゆ。ん。と。い。い。ぬ。還。く。情。縛。の
あ。ろ。ろ。の。知。り。い。山。家。老。さ。あ。同。め。乳。疎。死。人の鈍。ま。や。と。い。い。せ。め。め。め。語。路
五郎の眼を、睜。ま。時。を。張。り。怒。る。声。を。戦。く。慮。外。の。嘲。哂。大。膽。不。敵。是

奴飽きで鞭懲さむ。輒く実を吐くものぞとて、責よと、敦圀く、折から、高
屋の村長走の、あ。く。刀。折。む。知。り。口。れ。む。や。守。火。船。を。い。い。小。鳥。獵。の。為。と。て。
今朝も、御館と、ま。さ。さ。さ。い。く。の。を。道。通。い。ま。さ。さ。さ。あ。ん。間。も。遠。く。さ。さ。の
あ。ん。あ。ん。の。さ。さ。さ。と。と。輒。る。あ。驚。く。語。路。五郎の穀兵は、下。知。し。船。中。阿。佐
谷の村長許、牽りて、あ。い。大。田。小。文。吉。も。さ。宿。所。は、伴。で。酒。食。を、羞。そ
款待せよと、阿佐谷高屋の村長、ホ。言。葉。せ。り。く。分。付。て。食。共。侶。は、追。立
遣。い。さ。の。刃。道。次。の。い。い。主。君。自。胤。の。過。り。の。を。遙。う。ち。を。待。程。さ。葉
以。自。胤。の。鳥。網。吹。箭。騎。羊。ま。い。と。近。臣。ホ。持。し。四。五。十。名。の。後。者。と。後。お
後。先。立。と。あ。さ。さ。あ。い。近。つ。た。め。は。眼。代。畑。上。語。路。五郎が、道。次。を、額。つ。死
む。さ。さ。さ。と。語。路。立。り。近。臣。と。と。故。り。や。ゆ。と。同。せ。め。さ。さ。語。路。五郎を
あ。さ。さ。く。小。膝。を、進。め。く。並。四郎。船。中。ホ。惡。事。の。顛。末。と。始。と。と。旅。人。大。田

此度のりへ用捨をさうしつ又後日小説き彼船虫のいふと向れ僅ふ
 頭を擡さしむ曩々某縣兵を死下知同旨大田をあらめと云ふ船虫村
 長小預置くそよめれ故の如此々と云ふ彼船虫は遠く里よりこの
 世も果て常武にゆき人言をゆり直ぐそいふ甚くは錯誤といひつら然るに
 船虫は幸りてよ大田の長途の疲勞もあんな今宵且村長許りて
 のれと云ふを何と云ふ願ふ彼船虫は女流に似ける癡者も武藝家陳
 農丈小件は捕も逃さぬ笛と共に紛失する小條落葉果のおん両刀をささぐ
 索るるをり使は立る暇兵小が使建てるものとも二歳児も思ふ理の當然
 その職は居てもつるもさういふ罪人をさう困りて失のり抑誰が越度
 和殿のり彼船虫は執た船虫を牽りてとりて今宵獄舎敷系が急慢の罪
 脱れさうさをもと縋り又と論議は小夜の更まで語路五郎は権威に怖れ
 隻言一句も陳べぬ埋む非は枉る膝節の初るなり居縮まを痺痺に京登

らむともあふる阿佐谷村の過を多く勸解さう宿所をのり極
 兵と喝聚合く石濱の城戸をさうと総泉寺の鐘鐃々と夜の更さうより

第五十四回
 常武疑く一大士を囚ふ
 品七慢は奸臣と語説も

却説畑上語路五郎の蕉火は路振照も暇兵小をさう阿佐谷村へ赴く
 程さういふさう六七町は過たさう人々も前程の小草折敷で何さや
 豪々さう相譚さうしければぬくある怪も近くさう呼かけさう何
 のぞと咎も是則別人さう阿佐谷村長が莊客們とある聚合を縛の
 急説さうさうけり當下村長のと面さう立ぬ道次は額とつれ所眼代さ
 某木を救さうさう勸解れ莊客們も異口同音小急悲を仰たさう

救つてあへと叫ぶを語路五郎訝る。汝の船虫とち成るをきく何等の
故にあふ取合ふ。且つれををて救ひを乞ふ一切のあつてはあつた。狐小
魅される然らざる。汝の狐を魅えんと欲するとも。れ豈に術小乗せう
れんや疾正魅と顯さる。目よりれんせん。あつちの刀の柄の握るをうり。小握
詰てを睨まへる。氣色小呆る。村長小忙慌を。抗う。御眼代さ。早らせ
あふ。狐の所為で。いひを察する。所同類の悪棍小が所ある。一。嚮は船虫を
おく。系れ。あつち。下知状とあり。六。殊さう。夜行の用心。この。其客們八九
名と彼罪人を守護。この。処ま。ある。程。の。杜の樹蔭より。許多の癖
者。顯れ。出。或の鳥銃。或の白刃。得物々々。うち放。うち振。其。直小
敷。んと。これより。後。ま。う。あ。つ。ち。も。れ。推量。も。定。る。不。以。近。死。里。人。小。を。
駈。催。く。加。勢。と。う。ゆ。び。あ。ふ。あ。ふ。あ。ふ。人。ひ。り。も。と。ふ。て。凍。断。捨。る。捕

索の小草の上を這り。の。既。ま。な。船。虫。と。奪。ひ。ま。り。て。刺。殺。者。ひ。り。も。捕
ゆ。れ。ま。う。一。釋。立。と。か。ん。の。あ。ま。ま。と。額。と。集。め。く。商。量。果。る。折。り。う。
あ。ひ。う。る。は。処。を。過。せ。あ。ふ。度。と。失。ふ。ま。う。さ。え。の。後。前。より。の。恐。れ。入。て。と。
生。る。小。駭。く。語。路。五。郎。の。野。兵。小。と。面。と。合。と。呆。る。と。半。晌。より。忽。地。声。を
苛。ま。く。と。甚。胡。乱。と。れ。決。と。船。虫。と。あ。つ。ち。あ。れ。と。下。知。状。と。遣。せ。あ。ふ。い。
その。状。ゆ。び。と。あ。ふ。と。い。れ。て。村。長。遠。く。懷。袂。憤。鼻。揮。と。を。播。擲。と。も。
揮。と。と。も。鼻。紙。と。あ。つ。ち。の。け。り。悲。し。や。嚮。は。逃。と。死。より。落。せ。と。と。と。起。
月。と。燭。と。彼。此。と。草。推。と。と。索。れ。と。も。く。焦。燥。語。路。五。郎。頻。り。小。轟。つ。霹。
靂。火。の。隊。と。如。く。声。あり。度。と。是。奴。逃。と。く。逃。さ。や。汝。小。不。覺。船。虫。を。捕。
逃。せ。と。あ。ふ。と。と。同。類。小。相。譚。れ。渠。と。落。と。と。あ。ふ。と。虚。言。と。あ。つ。ち。を。あ。つ。ち。と。
夜。を。犯。と。と。出。て。來。つ。も。馬。加。殿。の。指。揮。と。と。と。彼。罪。人。を。翌。迄。と。と。獄。舎。と。敷。と。と。

為るふ汝木が越度とて連係せられ朽をさよ一人も漏さず縛めと烈に
下知は親兵衛一撥と走蒐く村長共十人許數珠敷糸めせけれ衆皆
面色は米の如く戦慄れて齒も合ぬ口も唱ふ念佛と雖も秋虫の鉦鼓さる
妻子のすつ虫といふ啼々鈴虫のすつ虫返過世の業と悟るひさりて
翌日の野の螢より先ぬ滅んとも歎く追立をて語路五郎の石濱の城
帰るといふ夜の夜の中村長木と皆獄舎を敷合せける程さる曉が
さる語路五郎の馬加が戸を敲るさるさる翌を告めとさる要時
臥房よりさる既小天の明日の目升て己の比及さるさる遅るけりと忙々
衣裳と改めさるさる馬加常武へ既さる名問注所在のと解くこれを
召る使さる遭ぬ胸うち騒ぐと鎮めめめ使ともさるさる常武さるさる
さる彼船虫といふさると同れて語路五郎敵さる由さる村長木が不覺を

船虫を解者木専去られとの一條をさるさる報知さる村長も村客
木も緊く禁獄せられさる同類と穿鑿せられ船虫を捕さるさる遠く
さるさるさる常武の勃然とさる眼を睜さるさるさるさるさる
船虫をさるさる村長木が罪輕さるさるさるさるさるさるさる
さるさるさる和主が罪のさるさるさるさるさるさるさるさる
声さるさる若侍木西二名阿と応てさるさる語路五郎を縁頼より種落
推伏さるさる忽地索をさるさる常武獄舎を送さるさるさるさる
けりさる阿佐谷の村長村客木が親族妻子の事の趣を傳て騒歎
くさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
幸しく食禁獄を免されり只畑上語路五郎のさるさる恩赦のさるさる

獄舎の中より多きうければこれと憐れむものなり又識るものなり渠は年
來民の膏腴を統する悪報ゆく馬加敷の髻の塵と採擷なり憎も
可惜命を損ぬと竊ふこれを評するれり妻も迫る世を去る歎き
送る子もみれば親族と朋友もその亡骸を葬りけり是より先千葉
の自衛の失を年暦一嵐山の尺八のみ入りよりその日のあけ帰城と彼犬田
とく咄える勇士の心を高成の常武は告る後渠と當家は笛を吹く騎も
優ふとて對面する所へければとあるはひもとも長臣小がまうても出ぬ
召出せきよのまれば且黙止する程は次の日馬加常武ひとり後堂小見
参りて名笛吹く室庫の返り悦びを述する且阿佐谷の村長も
謬て船虫を走らする緯の趣并小畑上語路五郎が罪科の箇様と
咄えのけて渠ホの禁獄せざるは八方一部と彼船虫と駈索ぬ追捕

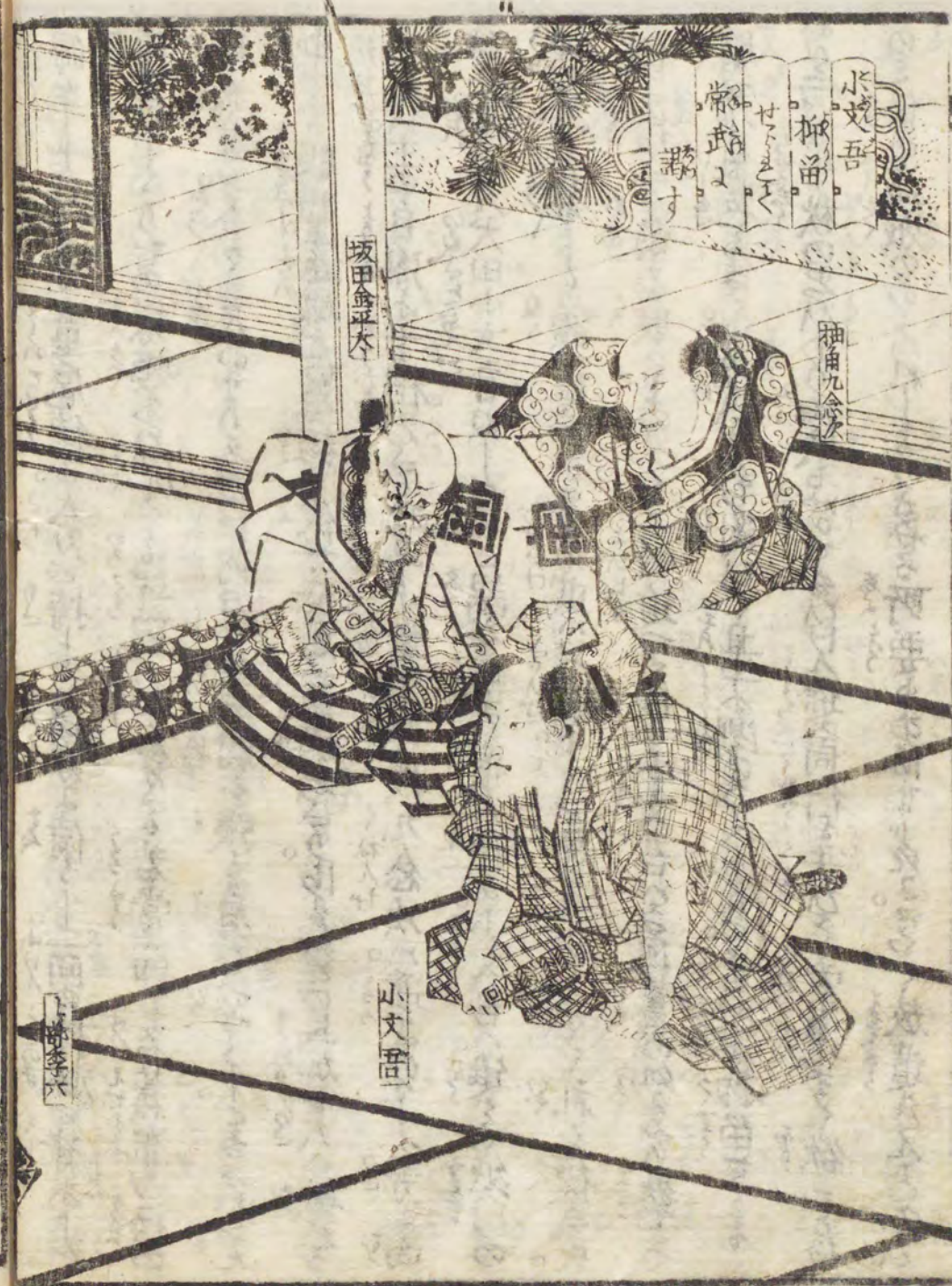
輒くは縦生方のそれとも原是匹婦のそれば喪家の拘は異るも
終つてみづう敷れんは賢慮あるけりいと異もまけよとて自衛の時
眉を起すめ失る笛の復とてどもは彼賊婦を鞠回せば小條は洛基末の西
刀のせであるよめり語路五郎が疎忽よりて村長ホが過失の禁獄
られも法は當なりありの人の賢君は古果は名物を宝とせば良臣賢者と
比翼ととて尚書小本文をえるまじやければ予が欲するものなり山の笛
よりも小條は洛基末の大刀よりも彼犬田小文五郎より渠が野楮と搏か
又並四郎不行包と刺せく輒くこれを撃ち笛め又船虫が贈りる笛を送く
奸計の杪を缺死の大勇明智賞感尤浅くば其方も亦このありの族
錦の管侍等兩るまじの勧め當家小仕へさせよ遠くは口とせ對面
うまのふく同れて常武小藤を進め仰ぐはとも彼小文五郎をちのふ

並四郎は鎧を刺れて弱り果て野指する。撲殺せしむ。又並四郎は
 害せし欺殺する。多柄ある。就中彼笛の小文吾が所持せし。後
 難とて。竊に板厨へ送り置けり。牧これ。亦知る。これ。先船虫
 訴出が実事。小文吾が陳する。所虚言。その。き。牧。あ。船虫
 冤枉を憐む。の。準。奪。う。ま。う。牧。船虫。既。逐。電。と。再。度。の。糾。問。
 より。され。何。を。この。疑。ひ。を。解。死。ゆ。き。然。と。今。更。小。文。吾。御。對。面。の。
 物。体。多。く。と。い。つ。と。憚。る。氣。色。も。あ。う。う。自。溜。且。沈。吟。と。
 つ。く。そ。の。人。と。ま。る。を。詭。譎。と。て。人。を。虚。げ。廢。棄。言。を。求。く。僥。幸。を。欲。す。
 の。ゆ。ゆ。づ。ば。再。再。四。の。勘。辨。を。の。ま。ほ。け。れ。と。宣。へ。常。武。武。武。の。心。
 惑。ひ。つ。愛。ま。る。と。憎。む。の。深。は。起。き。の。縦。小。文。吾。智。勇。あ。く。言。と。行。の

正しくとも。倘。敵。國。の。間。者。あ。ら。は。怖。る。き。の。ゆ。ゆ。づ。ば。再。再。四。の。勘。辨。を。の。ま。ほ。け。れ。と。宣。へ。常。武。武。武。の。心。
 徳。さ。う。の。れ。と。い。つ。と。憚。る。氣。色。も。あ。う。う。自。溜。且。沈。吟。と。
 辭。我。殿。成。氏。の。間。諜。者。あ。く。い。ん。九。智。勇。男。は。捷。き。の。人。を。用。戰。國。は。
 主。も。せ。ま。虚。々。と。諸。國。を。流。浪。せ。る。の。ゆ。ゆ。づ。ば。再。再。四。の。勘。辨。を。の。ま。ほ。け。れ。と。宣。へ。常。武。武。武。の。心。
 致。ん。あ。の。小。文。吾。を。獄。舎。に。囚。へ。さ。さ。重。く。責。懲。し。の。ゆ。ゆ。づ。ば。再。再。四。の。勘。辨。を。の。ま。ほ。け。れ。と。宣。へ。常。武。武。武。の。心。
 首。を。河。原。小。殺。集。で。後。来。と。成。わ。す。是。當。家。の。武。威。を。示。す。第。一。義。
 こ。い。と。言。番。巧。は。説。破。れ。自。溜。幽。さ。び。沈。吟。と。敵。の。間。者。と。間。者。あ。ら。は。
 れ。は。實。小。測。り。の。う。と。い。ふ。も。假。染。る。功。の。れ。を。賞。せ。ま。と。訓。せ。る。の。
 日。毎。の。郷。食。店。を。用。る。の。ゆ。ゆ。づ。ば。再。再。四。の。勘。辨。を。の。ま。ほ。け。れ。と。宣。へ。常。武。武。武。の。心。
 後。ま。る。あ。ん。これ。より。外。お。せ。ま。と。又。他。事。も。あ。く。宣。へ。常。武。武。武。の。心。

難く。あるは彼小文吾と某は預け衣衣食の賜の。あるは事平と真偽を辨。
いんといふは自亂飲いけ小疑心暗鬼を生むといふ疑心なるものとも同僚們と
合議し疎勿心の相計ひまゝとせと傲めたまふを常武は生たしと退出し。
程小大田小文吾は一日よりして馬加客房は留められ朝夕の饌を差する外は
訪慰するものも對面するところはない。ぬくぬくある小訝り胸安るは旅宿の
床は昨と。今日と且せば一日も千載は異なりを思ふをさるるのけり。かくて
二日小至り家老僕柚角は念次と呼ぶもの小文吾は自らよまて夫大記の
口状をいよつての教は暖きて宿所を正掃され款待もさ疎るるを。
許されき音ひるる。けいさく半日の閑暇をいよつて對面いんといわれり。
誘ふといひて先は立向毎の紙門を押開々々と奥より小書院はねて
ゆく程小馬加大記常武は縮羅の單衣は精好の袴を穿て聖柄の短刀を横

佩年十二四の童扈使は大刀を持し後方は侍し一間の樓牀を背ふく。
優半し。その縁頗る肥く色黒く力士めたる若黨四五名蕉布の袴の
袴取るる各々二尺のちのち巨内刀を帯て肘を張り肩を怒り。さうさうん
半る眼睛素破といふ組も伏せんとて面構を。馬加の馬加がく傲れる
威權の主の自溜十倍。當下老僕九念次の遙よりの方に向
ひく。是る大田小文吾ぬいといと謂を執り退く程は小文吾は進み紙門の
裡より恭しく額つたれども常武は只膝をもど加へのきやく礼を復さず。
側は措く扇を取るる。と。呼近づる小文吾は舊舊の処を然と
臆せ。氣色も常武より對ひ。某不測のふより。當所は抑留せらる。
二日千秋の思ひのり。何れもせひけん途同行を失ひ。索遣ま欲とる
の。笛の盜賊のあられよりさる所要のあらず。さう放遣せんこの。



願くそふ。この常武領地。愁訴寔に理り。其その誼をどうぞ心る
し。限りまけれど。いふせん。自胤和殿を疑ひ。緋速決。ゆかり。その故を。
彼ゆ。山の笛の。和殿。船中。贈。と。陽受。板厨の中。選置。こ。う。
ま。い。受。と。授。と。證據。一。只。是。の。ま。ま。當夜中途。癖者。の。そ。
彼。船中。を。奪。去。り。ぬ。是。の。ま。ま。再。の。ま。船中。首伏。の。苦痛。堪。ぬ。虚言。ゆ。
冤枉。を。憐。む。の。奪。取。ま。ま。一。つ。是。の。疑。ひ。の。二。つ。や。び。
あれ。加。う。和。殿。の。弟。の。傳。言。は。武。藝。も。亦。焦。れ。り。人。を。用。る。戰。國。は。往。き。
ろ。と。て。售。れ。ざ。う。流。浪。せ。う。と。あ。る。ゆ。ゆ。是。疑。ひ。の。三。つ。り。察。ま。あ。
千葉の孝胤の。同者。る。ま。里見。秋。時。我。の。同。謀。者。る。ん。速。に。禁。獄。と。う。が。
推量。違。ひ。首。と。河原。殺。鳥。武。備。と。隣。國。の。示。ま。と。君。命。嚴。る。
の。れ。其。を。く。諫。め。い。も。真。偽。明。白。の。證。ま。け。れ。其。さ。疑。れ。く。殆。寒。心。

あると。う。り。今。且。く。候。ふ。某。方。便。を。旋。ら。主。君。の。疑。ひ。を。解。人。日。進。退。
その意。は。儘。ま。と。の。れ。く。故。舊。小。文。吾。へ。又。一。層。の。患。ひ。と。う。刺。さ。如。き。
胸。膈。は。ま。ま。の。う。さ。る。ま。と。も。必。ひ。の。貌。を。改。め。必。ひ。け。た。ん。疑。ひ。理。り。
と。も。覺。ぬ。之。彼。船中。を。逐。電。より。還。る。某。を。疑。れて。追。ま。り。首。伏。受。實。
と。ま。り。と。せ。う。の。折。い。る。道。達。や。又。某。を。敵。の。同。者。る。ん。と。あ。れ。る。人。
行。德。ま。ま。と。彼。外。の。里。人。ホ。同。の。舊。里。の。同。老。父。の。某。の。五。才。米。に。
腰。を。折。め。人。の。為。に。刺客。と。う。ま。初。め。市。人。今。の。浪。人。古。那。屋。の。男。兒。と。な。つ。孫。
あ。の。隠。れ。の。ま。の。い。の。ま。の。義。を。り。今。一。度。某。が。る。諫。め。の。彼。を。疑。ひ。
解。ま。る。ま。の。ま。の。如。く。る。愛。顧。を。祈。ま。る。と。只。管。の。請。求。れ。常。武。領。
嘆。息。し。て。い。る。趣。み。る。理。あり。あ。れ。と。行。德。の。當。家。の。昔。領。る。の。う。今。と。
千葉の孝胤の。米。邑。ま。れ。敵。地。の。と。輒。く。人。と。和。殿。の。素。生。と。向。れ。や。

うら仰た。いふれば枉津日の神のまうゆ。黄縁く。やまをねむる。あまの
荒茅山の厄難より。別れ。四友の存亡を夢あふも。知す。預けられる。西園の
女人の往方。今ふ定まる。ま。舊里の親。わ。怪。わ。父。喜。ぶ。く。あ。る。べ。死。の
齡。ゆ。て。怪。の。尚。鳩。車。竹。馬。の。年。ゆ。有。け。れ。を。ひ。彼。を。あ。い。身。の。あ。ま。の。り
と。い。も。心。の。四。方。ふ。ま。う。ぬ。日。も。う。一。仏。説。は。す。く。火。宅。の。煩。惱。苦。海。の。風。波。の
これ。多。う。一。是。併。馬。加。大。記。が。妬。諱。は。起。り。て。虐。ら。う。と。の。如。く。渠。の。奸。曲。の
小人。の。誠。多。う。わ。太。功。の。細。謹。を。顧。む。大。礼。の。小。讓。を。辞。さ。う。と。あ。く。れ。を。
の。諸。折。戸。を。推。破。く。出。ん。の。難。く。も。あ。う。ね。この。処。も。鎖。を。披。く。む。い。そ。で。う
城。門。を。出。され。ん。や。愁。ま。抑。留。せ。れ。求。く。恥。辱。を。受。め。う。近。い。ふ。ま。と。さ。と。
胸。の。ま。い。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。鳥。の。翅。を。死。を。恨。ま。不。樂。音。を。鳴。ね。果。る。死。
籠。は。養。れ。て。友。の。あ。る。ま。崔。色。時。墓。も。又。タ。れ。ふ。り。は。け。り。か。く。秋。ゆ。き

冬。枯。れ。の。寂。し。死。宿。は。年。暮。て。明。れ。い。文。明。十。一。年。春。も。二。月。ま。り。く。づ。れ。の。ま
あ。る。ま。る。人。も。死。庭。の。花。の。いろ。く。る。い。と。美。く。咲。く。程。は。彼。帰。と。倉。頭。の。常
より。も。あ。る。ま。る。ま。る。目。く。く。草。を。刈。り。け。り。中。は。品。七。と。い。う。老。倉。頭。の。小。文。吾。を
訪。慰。め。く。木。訥。多。う。物。の。い。ひ。さ。る。老。実。ま。ち。る。れ。る。小。文。吾。も。亦。隔。み。の
鎌。休。め。の。折。毎。は。煎。茶。を。飲。せ。る。う。う。江。湖。上。の。今。昔。ま。う。ち。の。い。せ。で。う。
う。品。七。め。く。飲。び。く。稍。親。ま。い。る。程。は。一。日。品。七。と。い。う。ま。り。目。く。く。死。の。ま。れ。が
午。餉。過。く。縁。頼。は。尻。う。ち。掛。く。越。ひ。て。う。小。文。吾。を。勞。ひ。て。又。端。近。う。出
ふ。品。七。を。品。七。要。時。ま。う。て。い。う。苦。勞。を。あ。め。め。め。あ。る。人。の。く。ろ。の。ど。け。く。浮。れ。ぬ
る。花。の。春。の。面。色。の。病。者。め。る。瘦。ま。る。ま。る。を。あ。ま。を。現。を。談。で。め。わ。ん。く。
小。側。の。ま。拘。ら。ひ。て。旅。や。く。人。の。川。留。れ。困。龍。ら。れ。て。既。ぬ。ま。や。一。歳。あ。く。く。ま
ぬ。れ。い。と。痛。く。ゆ。の。ま。又。せん。ま。る。た。め。う。人。の。過。世。の。業。ま。う。て。知。智。者。も。男。ま

趣合なく生涯頭を擧難うとせよとの儔より近うこの武藏ある大塚は
大塚番作といひ猛者の家督を姉夫の横領せられて憤りあや堪ざりけん
腹を斫て死ぬひたその獨子も親はからぬ器量ゆりとう人ものひがいのふり
けんうの知らねど今もその迹絶つてをかれは智者でも勇士でも時ふ遇ねば埋
れて人あも知るまほさうのれゆりさげれ人ち七轉八起とうの世話もあるふる年
よりくええふいよりや一年二个月囚徒は等し死も隨意ある日のあらむやのあ
まといふ物を思ひ命を縮りのもとよみづう心を長閑くのちて厄の國を待
めひのと慰められて小文吾の曾うち騒ぐと推鎮めひと趣理のふれも亦大塚親
子の名のまの豫てはくさる和殿の相識るう一飲と向れて品七頭とうち掉至否
相識てはるけれども大塚の里人は糖助といふれのを先代より由縁あり渠世ふ
在り程の訪も訊れもせよよりそが噂をきくも現世間のさあぐさる高く

のれぬきまの權門馬加敷いゝとあそりた人まともなと毎々苛く謀
 課く守るまでも憚りのふ甚麼る過世のやうといふ小文吾膝を進めて
 その縁由はまゝ一せし惹いた筋のまともなれ他郷のりれふあははは
 人のまければとも外へ洩やするさうちやあひやとをのさされて品々と頭と挫
 らく四下とんえり。おやとよる所は辭些々慎と深人となり彼下條を告り
 さん忘れても洩しめさばも及せぬけん。さうして享徳四年の秋のころ下総の千葉
 家二流は分れて合戦にとはるけり。縁故を原ふ當君故千葉胤直主と
 尚弱冠のりける千葉の一族原越後胤房は濟我の御所成氏朝臣は後ひ
 多と薦めさう。圓城寺下野守尚任の鎌倉の管領山内顯政小後ひとと諫め
 ぐ胤直遂に圓城寺が議論を是とて鎌倉の管領方よりあへ胤房より
 憤りて成氏朝臣不加勢をも受千葉の馬加陸奥入道光輝と相共軍兵數

千と引率とて同國又胡志摩の三ヶ城を攻潰し、躬て大將胤直の誥腹を
切らせり。胤直の父前千葉公入道常瑞、舍弟中務入道了心、亦一ち
腹をせめされける。これより成氏朝臣の沙汰とて、陸奥入道光輝の嫡男孝胤と
千葉公任とて千葉の城を居置れ、又管領家の沙汰とて、康正元年の
冬のころ入道了心の長男實胤と、二郎胤胤と執立て、武藏の石濱赤塚の両城を
居置れり。千葉家のいふ二流に分れて互あるが怨讐言の鏖をみる。磨は
あひける。孝胤はよびて千葉康流の郎黨、馬加記内常武といふのありき。
孝胤は仕へがを過ぐるのありき。下総と遠電し、石濱殿へ降参し、千
葉の爲体と演説し奉公無二と進止の程は実胤を登用して、遂に長臣と
する。あが記内と入記と改め、持し時め、米けるが、程は実胤ぬへ年未
多病とて、遁世の情願なり。家督と舍弟胤胤は譲らんを議り、あが

馬加記武兼と、肚裏より、赤塚の城中の栗飯原首胤度龍山逸東太
縁連と、西面箇の老黨あり。いづれも當家の一族、中胤度へ下総志摩の
如来堂より常瑞了心自殺のとて主君と共に腹切る。栗飯原右衛門尉子
るより、自胤は隸られ、自胤家叔と、美嗣と、彼兩人も随ひ來て第一の
權門とある。彼より、權勢を削られて外、少く朽を、あが
縁連は血氣の杜攸ぬと思慮あり。ねば謀る難く、ものづめれど心
憎む。胤度と要するまゝと密に謀を旋じ、これより後時々、赤塚に
赴死く。自胤の安否を伺ひ、栗飯原龍山の西老黨ホと他事あり。ま
交り、一日常武は実胤の宝庫より、あが山といふ一節截を潜り、あがり
あがし、これを懐し、赤塚より栗飯原が宿所は赴死密議ありと倡て、あ
いと兩室は對面し、其く、某け、あがり守の仰より、あがり

此度時我殿と面管領家と。和睦の風聞定之守山近江程不家督と
 赤塚殿を以て譲り。あんと思召定められける。面管領の助力ありといふ
 とも。今こそ時我殿より。思われぬ。あんと。いふ。小後安ふ。いふ。これ
 彼。和睦の。世。披露。先。使者。を。時我殿へ。進。せ。ぬ。後。の
 ゐ。より。の。後。に。されども。石濱より。遣。さ。鎌倉へ。の。影。護。し。自。亂
 より。遣。さ。ふ。何。の。疑。ふ。就。く。時我殿へ。進。さ。死。牽。出。物。の。當。家
 本。國。離。れ。し。より。さ。る。重。器。も。一。の。節。截。へ。乃。祖。貞。亂。の。時。より。
 相。傳。の。の。中。に。御。所。も。知。り。召。さ。る。れ。ば。これ。を。進。さ。ぬ。り。この。餘。の。物。も。
 自。亂。の。ころ。と。相。添。さ。ぬ。た。然。こ。の。尤。密。談。され。ば。汝。竊。の。亂。度。が。宿。所。は
 赴。け。く。予。が。意。を。傳。へ。よ。と。仰。られ。て。い。と。實。言。し。や。ふ。説。示。し。し。件。の。魚。と。遞。与
 ま。よ。わ。ん。亂。度。針。さ。む。致。び。く。一。点。も。疑。つ。も。仰。の。趣。有。く。死。す。ま。よ。奉。り

いひぬ。速。お。せ。の。け。て。仰。の。ま。ふ。く。相。計。り。其。時。我。へ。赴。け。く。歸。城。の。後。彼
 処。の。首。尾。を。上。し。ひ。ん。の。安。宜。く。わ。ん。執。成。を。憑。な。る。と。答。へ。く。常。武。と。わ
 謨。濟。し。う。と。う。の。中。は。含。咲。く。石。濱。へ。も。還。り。け。却。説。粟。飯。原。亂。度。へ
 そ。の。日。自。亂。の。同。り。入。り。多。う。く。馬。加。常。武。が。傳。へ。る。実。亂。の。密。意。を。演。て。件。の
 笛。を。進。う。せ。し。自。亂。感。悦。大。う。さ。る。石。濱。殿。の。え。計。ひ。其。を。思。い。ぬ。ま。
 ゐ。ん。慈。愛。さ。る。の。れ。を。い。さ。る。違。背。致。さ。る。現。時。我。殿。へ。牽。出。物。は。笛。の。ま。よ。
 い。わ。わ。ん。今。一。品。何。を。欲。得。と。お。ひ。く。問。ふ。ど。亂。度。要。時。沈。吟
 し。く。呈。表。し。し。鎌。倉。へ。え。使。を。奉。り。し。折。は。彼。地。の。購。得。は。長。短
 二。口。の。刀。の。焼。刃。尋。常。さ。る。と。り。く。と。の。後。進。上。仕。り。し。小。笹。落。垂。示。こ
 ゐ。名。づ。け。ら。る。く。と。く。御。秘。藏。あ。る。と。さ。る。と。彼。兩。刀。を。然。る。べ。れ。とい。ひ。ぬ
 果。ぬ。自。亂。と。頗。ふ。領。死。微。咲。く。彼。大。刀。の。名。を。忘。れ。し。牽。出。物。の。ま。よ

品昔物語
 のくしと
 東歌原と
 合せえろ



八
 傳
 六
 冊
 系
 三

共
 通
 泉
 堂
 蔵



八
 傳
 六
 冊
 系
 三

救ひぬ。この使は立人の首あらず誰うせん疲勞あらずや。
と亦他事ある宣へる度然と立ち笑ふ仰わくとも既ふんや用
意を致しう。明朝獲足仕うんといふは自落鉄びく次の間は侍る
近習の者ふあろゆさうく小條落葉の雨刀を嵐山の笛りる共る度
遍与しあへる度れを受とりてそく宿所は退死に。その日の中
細工人亦は笛と両刀を仕衣らるるに相両二箇造りて猛小敷正行
其本も現戦國とく逸早に兼馬持鎗甲冑極命の今宵一節切小
條の雪飲消もく其処は落葉の雨刀を携さる若黨二名と後者と
て十人なり。その詰早まううの辭我を望て起りけ。畢竟落度辭我使
と又甚麼る話説うあつ。その巻は著しう出像をそも大を知らん。

里見八犬傳第六輯卷之二終

